

佐賀県

街道 1

佐賀を特徴付ける道路遺産は、佐賀平野を東西に横断する古代官道・西海道肥前路の痕跡（神崎市・吉野ヶ里町、古代）**A**である。痕跡と書いたのは、上空から見れば 16 キロにわたって、古代官道の直線ルートを大まかに辿ることができるが、いざ地上に立ってみると遺構が明瞭に視認できる場所が少ないからである。



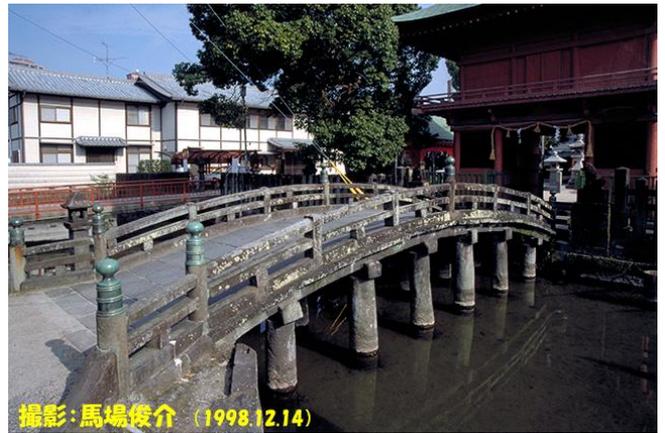
上の写真は神崎市の「切通し」である。左の直線的な樹木境界と、右遠方の林の左側との間が官道であるが、言われてみなければ識別できない。現地での看板の説明も不十分である。古代の七道は江戸期の五街道と異なり、都と各地方を直線状に結んだ“情報伝達のための道”であり、如何にも人為的な広幅員の道路であったが、全般に保存状態は芳しくない。全国的に見ても、東京・国分寺市の東山道武蔵路以外は、古代道路らしい壮大さを感じさせる遺構は残っていないのが現状である。

街道 2

佐賀は九州にありながら石桁橋の多い県である。本リストでも、石アーチ橋が 3 橋に対し、石桁橋は 12 橋にのぼる。それらの代表的存在が与賀神社の萬歳橋（佐賀市、慶長 11 (1606)、国重文）**A**〔右上の写真〕で、わが国でも最古級の石橋である。

街道 2

隣県である福岡は全国最大の境界石の集積地だが、



佐賀県にも若干の名残が見られる。三瀬峠の肥前・筑前国境石（佐賀市、文化 15 (1818)）**B**は、「従是南 肥前國」「従是北 筑前國」と刻まれた 2 本の同サイズの標柱が移設のお陰で密着して建っており珍しい。また、七曲峠～佐賀橋間の肥前・筑前国境石群（吉野ヶ里町・みやき町、元禄 13 (1700) 頃）**A**は、元禄 9 (1696) 頃の国境争いを経て短期間に設置されたもので、当時の歴史をよく現している。

農業 1

佐賀県の最大の特徴は、江戸初期の佐賀藩士・成富兵庫茂安の残した農業・治水遺産群の存在である。成富兵庫は戦国武将で、天正 15 (1587) の九州征伐の際に活躍して名を馳せ、朝鮮出兵でも活躍、42 歳で佐賀藩家老職に就いてから 75 歳で死ぬまでの 30 年以上にわたって藩内の灌漑・治水事業を主導した。戦国武将で公共事業に手腕を発揮した人物は多いが、その筆頭的存在である。全国的に見れば、時代が少し下り戦国武将出身ではないが、岡山藩の郡代・津田永忠と並ぶ巧土の知恵者である。

成富兵庫の高い技術力の中で特に優れたものが、松浦川の河底に 2 本の逆サイフォンで通した馬ン頭伏越（伊万里市、慶長 11 (1611)）**A**である。わが国に逆サイフォンの原理が、いつどうようにして伝わったのかは定かではないが、馬ン頭伏越は、その最初期にして最大規模の実施例である。逆サイフォンで有名な金沢・辰巳用水ですら、最初の木管の敷設が寛永 11 (1634) であり、馬ン頭は 20 年以上先行している。辰巳の場合は天保 14 頃～嘉永 3 (1843-50) 頃に石管に取り替えられるが、馬ン頭では河底部分の木管に“先細りの木桶”を連続させた特殊な構造



撮影:馬場俊介 (2012.5.14)

を採用し（可撓性が高く壊れにくい）、かつ、2本の木管を交互に更新する管理法を採用していたため、昭和3にコンクリート管に改修されるまで300年以上にわたって現役であり続けた。

農業2

成富兵庫の農業遺産で最も著名なものは、現在、石井樋公園として整備されている一連の取水施設群（佐賀市、元和年間（1615-24））**A**である。嘉瀬川の大井出堰、導流堤である象の鼻と天狗の鼻、多布施川への取水樋門である石井樋、余水吐にあたる二ノ井手堰の4つの施設で構成された一群の“装置”であるが、ここでも成富兵庫らしさが随所に見られる。特に、象の鼻と天狗の鼻は、流速減少と沈砂促



撮影:馬場俊介 (2009.1.17)



進のための屈曲水路で、兵庫自身が後年に造ったお茶屋の堤の象の鼻を除けば全国に類例はない。

農業3

成富兵庫の干拓事業として知られているのが五千間土居（白石町、寛永期（1624-34））**A**である。長さ約9キロの締切堤防により約300haの農地を生み出したもので、干拓面積は大きくないが、堤防を50～100mごとに屈曲させ荒波を抑えたとされる工夫は他に例がない。これに対し、江戸期最大の岡山の沖新田（1900ha）は、瀬戸内海の内奥部ということもあって直線堤であった。五千間土居の150年後、さらにその外側に六千間土居（白石町、天明4（1784）以降）**A**が造られた。堤防延長は約12キロと一層大規模になったが、両土居とも国道444号として転用された部分が多く、現状から往時の姿をイメージすることは困難である。

六千間土居では、堤防そのものよりも、土居により誕生した干拓地の水不足解消のために築造された焼米溜池（武雄市、寛政12（1800）、市史跡）**B**が有名である。支藩に水を送るための施設なので、水利権にからむ多様な協議を必要としたが、関連する膨大な記録が残っていることでも貴重とされる。



撮影:馬場俊介 (2012.5.14)

農業4

佐賀平野には古代条里制の時代からクリークが整備され、佐賀藩も積極的に整備した。クリークは導水路と溜池と排水路を兼ねた佐賀平野独自の農業形態と言える。現在でも多くのクリークが残っているが、造られた時代は定かでない。近畿地方の環濠集落と異なり集落内にまで不定形の水面が入り込んだ

風景はこの地域でしか見られない文化的景観として貴重である（写真は、神埼町上六丁のクリーク）。



農業 5

成富兵庫とは無関係だが、全国的に見て特記すべき農業遺産に3基の石造取水堰がある。第一は南川良原の石井手（有田町、慶長年間（1596-1615）？）**B**で、野面積みと打込みはぎの中間の石積みをほぼ垂直に積み上げた構造（高さ2.8m）は他に例がなく、近代の練積コンクリート堰堤に近い形態である。また、後世の追加と思われるが、堰の天端が飛び石状に整備されていて（「ぴょんぴょん橋」の愛称）、越流時にも歩いて渡れるところが面白い。



残る2基は、岩坂井堰（伊万里市、幕末？）**B**と原田井手（武雄市、慶応4（1868）以前）**B**である。ともに曲面を強く感じさせる石堰で、一見すると似ているが、①石積み方式、②余水の処理方法、③断面形状、④上流縁の遮水石板の有無の4点で両者は全くの別物である。前者は、唐津藩の一連の取水堰の流れを汲んでいるように見えるが、後者は、佐賀藩の他の取水堰には見られない特異的な存在である（右上の写真は、原田井手）。



漁業 1

江戸期の四大捕鯨の一つと言われる「西海捕鯨」の中心地であった呼子町（唐津市）には18・19世紀の鯨供養塔が4基建立されている。

鉱業 1

佐賀県には、平成20に発見された大坂城石垣石切丁場の跡と推定される谷口石切丁場（唐津市、江戸初期（1620-29）？）**A**がある。山上に、完璧に整形加工された巨石が4個放置されたまま残る“謎”の石切丁場である（山上で石材を加工すれば、山から降ろす途中で欠損する可能性が高い）。さらに、藩



内でこのような巨石の利用はないため、大坂城で何らか形で利用されたと推定されてはいるが、大坂城の石垣で直接確認されたものは見つかっていない。

産業 1

佐賀藩の第十代藩主・鍋島直正は嘉永 5 (1852)、日本初の実用反射炉の稼働に成功する。初めは鉄の溶解がうまくいかず失敗続きだったが、手引書となったオランダの『ロイク国立鉄製大砲製造所における鑄造法』を翻訳した伊東玄朴、直正が育てた蘭学者、刀工や鑄物師らの伝統技術を結集して鑄造に成功する(築地反射炉)。そして、翌年完成の多布施反射炉と合わせ、慶応年間までに大砲 271 門が製作された。さらに、佐賀における成功は、“現存最古の実際に稼働した反射炉”として知られる静岡の葦山の反射炉に受け継がれていく。この、わが国の近代製鉄史上最重要の築地反射炉は、長らく場所すら特定されず、平成 22 の発掘調査でも炉本体の位置は依然として不明なままである(多布施反射炉も同様)。

防災 1

農業 1 の冒頭で断ったように、成富兵庫は農業と治水の両面で優れた事績を残した。三方瀉の開発武



撮影:馬場俊介 (2012.5.14)



雄市、寛永 2 (1625) ?) B は、灌漑・治水・防潮の 3 つを兼ねた複合事業であった(左下の写真は増水時の遊水地の締切堤と生見川)。これまで見てきた中では、岡山県の百間川河口で沖新田への溢水対策として造られた河口の唐樋と大水尾の組合せが代表的な複合事業であった。津田永忠と成富兵庫という江戸初期の二大土木巧者と、2つの類似事業の存在は、偶然ではなく必然であったとも言える。

防災 2

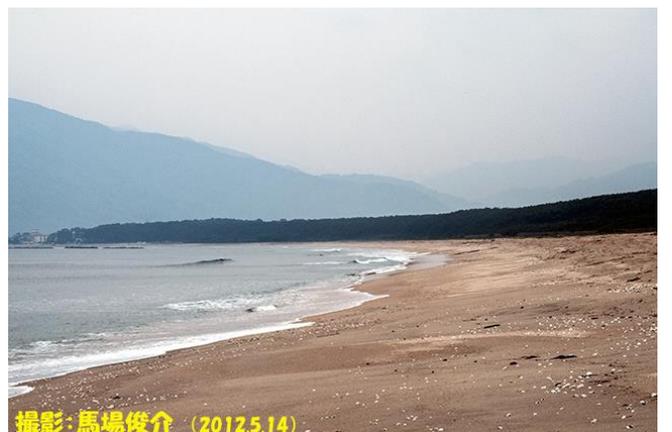
成富兵庫の治水事業の中で最も有名なものが筑後川の右岸堤で、その数少ない現存箇所が千栗土居(みやき町、寛永 11 (1634) 以前) A である。土手内部に、漏水防止のため「はばね土」(版築状の緩い粘土)が用いられたる点に特徴がある。



撮影:馬場俊介 (2009.1.17)

防災 3

虹の松原(唐津市、江戸初期、国特別名勝) A は、初代唐津藩主・寺島広高の代表的な業績で、現存するわが国最大級の海岸防風林でもある。長さは 4.78 キロ、当初から伐採が厳しく禁じられてきたことが、現代における良好な保存につながった。



撮影:馬場俊介 (2012.5.14)